

原著論文

合意形成に向かう家族のパワーを扱う看護技術

Nursing Intervention Utilizing Family Power for Reaching the Mutual Agreement among the Family Members

時 長 美 希 (Miki Tokinaga)* 長 戸 和 子 (Kazuko Nagato)*
中 野 綾 美 (Ayami Nakano)* 畦 地 博 子 (Hiroko Azeti)**
益 守 かづき (Kazuki Masumori)* 青 木 典 子 (Noriko Aoki)*
川 上 理 子 (Michiko Kawakami)* 野 嶋 佐由美 (Sayumi Nojima)*

要 約

本研究は、家族の合意形成を支える技術を抽出することを目的として実施した研究の一部である《家族のパワーを扱う技術群》について報告する。ロールプレイ、インタビューから得られたデータを分析し、抽出された技術の整理・抽象化を繰り返した結果、家族の合意形成を支えるために状況に応じて組み合わせられて用いる技術の1つとして、《家族のパワーを扱う技術群》が明らかになった。看護者は、家族が合意形成をしていく場面で、家族のパワーが、家族の問題解決の仕方や意思決定にどのように影響を及ぼしているのかを把握し、【家族の中の弱者を支える技術】【家族の中の不均衡を調整する技術】【専門家や家族のパワーを効果的に活用する技術】を用いて家族が全体として合意形成にコミットし、家族内の勢力や影響力を合意形成に活かすように支援していた。《家族のパワーを扱う技術群》は、常に用いられているわけではなく、合意形成が滞ってしまう場合、その家族の問題を見極め、状況に応じて組み合わせられて用いられる技術である。つまり、家族の合意形成の中核である家族の力を保持しながら意思決定をすることを側面から支える技術である。家族のパワーの特性は、「実体的-構造的な側面」の勢力を基盤としつつも、家族の生活の局面で、「関係-機能的な側面」の勢力が顕在化し、強い影響力を及ぼすという家族勢力の特性が反映されており、看護者は、それをふまえた巧みな技術を活用していると考えられた。また、家族のパワーを扱う技術は、①家族が均衡を保ちながら全体として合意を形成する、②多様な人材のパワーを活用する、という特徴を持っていた。

キーワード：家族看護介入、合意形成、家族パワー

I. はじめに

家族は、病気を持った家族員を抱えた療養生活の送りかたについて様々な決定を迫られている。退院後の生活の場をどこにするのか、在宅療養をどのような形で行っていくのか、介護の役割をどのような形で担っていくのか、社会資源をどのように活用していくのか、など家族として意思決定していかなければならない場面は多い。意思決定の仕方は、家族のおかれている状況や家族の個性によって多岐にわたっていると考えられるが、家族が全体として、自らの力を使いながら意思決定をしていくことが重要である。そのためには、家

族員がそれぞれの考えや希望を十分に出して話し合いをしながら、家族全体で合意形成をしていくことが必要である。

家族には、家族勢力が存在し、日常的問題から複雑で葛藤を含んだ問題まで、様々な状況で展開される意思決定や問題解決、葛藤解消、危機調整などのファミリープロセスの中で影響を及ぼしている⁵⁾。家族の決定過程に家族勢力は大きく影響するが、家族が合意を形成する場面においても、家族勢力を基盤としたパワーが家族内に存在し、家族員の考え方や行動に影響を与え、合意形成のプロセスに影響を及ぼしていると考えられる。

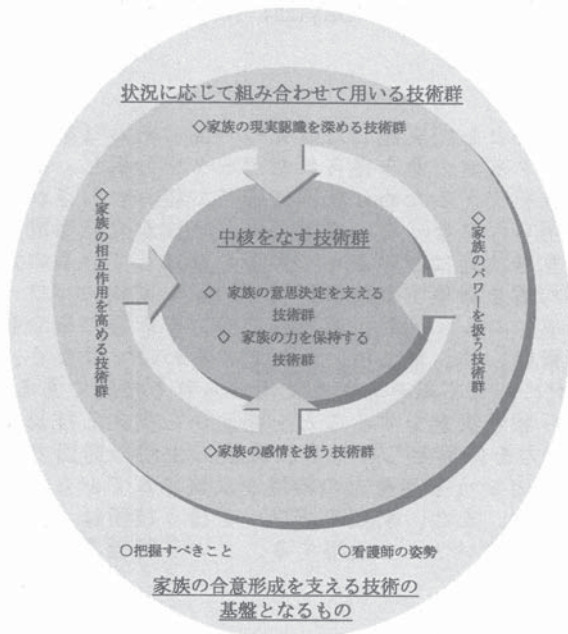
「家族の合意形成」とは、病気の家族員を抱えながら家族生活を営む中で、家族として

*高知女子大学看護学部看護学科

**高知女子大学健康生活科学研究科博士後期課程

どのようにしていくのか、ひとつの方向性を見出し、意思決定をしていくことである。この研究では、「家族」を患者を含めた家族集団として捉え、「合意」とは、日常的なできごとや療養生活の過ごし方に関して、家族内でいくつかの意見の相違を含みながらも、ひとつの状況の中で、あるいは一時的なものとして家族がひとつの意見にまとまることとして捉えている。

図1 家族の合意形成を支える技術



家族の合意形成を支える看護技術を抽出することを目的として実施した研究⁷⁾の結果、家族の合意形成を支える技術は、『家族の合意形成を支える基盤となるもの』を土台に、『家族の合意形成を支える技術の中核をなす技術群』と『状況に応じて組み合わせて用いる技術群』の3層から構成されていた。本稿では、この研究の一部として、看護師が、状況に応じて家族内のパワーを扱いながら効果的に合意形成を進めている現象に注目し、『家族のパワーを扱う技術群』に焦点を当てて報告する。

II. 研究方法

ロールプレイ、インタビューから得られたデータを質的に分析し、抽出された技術の整

理・抽象化をいくつかの段階、いくつかの軸によって繰り返すことにより、家族の合意形成を支える普遍的な看護技術を抽出した。

1. ロールプレイによる技術の抽出

家族の合意形成を促す技術に関する看護研究が過去に見られず、最初からインタビューでデータを得ることに限界があったこと、家族の合意形成を促進する技術は場面が特殊であり参加観察法を用いることも困難であることから、まずロールプレイによる方法で技術の抽出を試みた。

データ収集：家族の合意が必要であろうと想定した事例を作成し、研究者が2人のペアで、看護者役割となり、それ以外の研究者あるいは臨床経験のある大学院生が家族役となり、複数の家族員と看護者で話し合う場面のロールプレイを行った。取り上げた事例は11事例で、1事例に対して平均的に60分程度のロールプレイを行った。事例は、退院の選択、在宅ケアについての合意形成の場面を中心に想定した。また、事例の患者は、小児、成人、老人を設定し、疾病については、痴呆・精神疾患・脳血管疾患・糖尿病・小児喘息・ターミナル期を設定した。

データ分析：ロールプレイはすべて録音し、逐語録を作成した後、看護者役を演じた研究者が活用した技術に焦点を当てて分析し、その分析結果を基に、研究グループで討議しながら再度分析を行った。臨床領域により、活用する技術の共通性や相違性、事例の持つ特徴による共通性や相違性について検討しながら比較分析した。

2. インタビューによる技術の抽出

実際の合意形成の場面で看護者が用いている技術を比較検討すること、ロールプレイに基づいて抽出された技術の妥当性を確認するためにインタビューを行った。

対象者：合意形成に取り組む家族の看護に携わった経験があることを条件とし、研究の内容について説明し、同意の得られた看護者18名を対象とした。

データ収集：研究者等が作成した半構成質問紙を用い、各対象者に対して2回の面接を行っ

た。面接内容は、同意を得た後に録音した。
データ分析：インタビューは対象者の理解を得てテープに録音し、逐語録を作成し、質的に分析した。分析結果を比較検討し、技術の修正・追加、意味内容の類似した技術をまとめる作業を繰り返し、技術を抽出し構造化した。

倫理的配慮：インタビューは、口頭及び文書にて、研究の目的や貢献、参加の自由など参加者の権利、データが研究以外の目的で使用されないことなどを説明し、同意の得られた対象者にのみ行った。

Ⅲ. 結 果

家族のパワーを扱う技術とは、「家族が合意形成をしていく場面で、家族のパワーが、家族の問題解決の仕方や意思決定にどのように影響を及ぼしているのかを把握し、弱い立場の家族員を支えることを重要視しながら、家族のパワーの不均衡を調整することによって、安定させたり、流動させながら、家族内の勢力や影響力を合意形成に活かすようにする技術」である。

《家族のパワーを扱う技術群》として、
【家族の中の弱者を支える技術】
【家族の中の不均衡を調整する技術】
【専門家や家族のパワーを効果的に活用する技術】
の3つの技術が抽出された。また、表1に示すように、

表1 《家族のパワーを扱う技術群》

技 術	看 護 行 動	看 護 行 為
家族の中の弱者を支える技術	弱者を支える	弱者を保護する
		弱者を補強する
		代弁する
家族の中のパワーを調整する技術	不均衡を調整する	発言力を拡散させる
		発言力を抑える
		勢力を変化させる
専門家や家族内のパワーを効果的に活用する技術	専門家の力を効果的に活用する	パワーを引きよせる
		専門家のパワーを活用する
		効果的にパワーを活かす状況を作る
	家族のパワーを活かす	合意に近い発言を活用する
		家族員の特性を活用する
	キーパーソンを活かす	

それぞれの技術には、複数の看護行動及び看護行為が含まれている。

以下に、それぞれの技術について、事例を用いながら説明する。

1. 家族の中の弱者を支える技術

家族員がそれぞれの考えや希望を、十分にだして話し合いをしながら、家族全体で合意形成をしていくために、家族の中でパワー・立場・発言力などが弱い家族員を把握し、その人に共感的に接し、家族の中で、弱者を支えていくことが必要である。この技術には、「弱者を支える」という看護行動が含まれている。

「弱者を支える」行動は、弱い家族員の存在を保護して、その人の意見や立場を補強するなど、家族の中で弱者を支えていくアプローチである。看護者は、弱い家族員に寄り添い、共感的に接して理解を示し続けながら、その人を守ったり、代弁することによって、支えていた。また、発言力のない家族員の意見や存在を強めるために、看護者が弱者を支えるだけでなく、他の家族員によって支えられるように意図して関わっていた。これには、<弱者を保護する><弱者を補強する><代弁する>という3つの看護行為が含まれていた。

1) 弱者を保護する

家族の中で、パワーの弱い人を守る行為で

ある。看護者は「患者さんはどうやっても弱い…だからその分、寄り添ってあげないと…」と、意識的に患者を弱者として捉え、それゆえに患者を保護していた。

2) 弱者を補強する

話し合いの中で、発言力のない家族員の意見や存在を強める行為である。看護者は、患者が家族内で孤立し、力が弱くなっている状況を変えるために、意図的に患者が自分の体験を語れるような場を作り、患者の体験を看護者が受けとめていくことによって、発言できなかった弱い立場にいる家族員が、家族にわかってもらえるようにしていた。

3) 代弁する

家族員の気持ち、考え方、状況などをその人に代わって表明し、弱い家族員を支える行為である。看護者は、家族員がそれぞれ大変な状況にあるためお互いの状況や気持ちがみえなくなっている場合、家族関係に問題を抱えており十分に話し合うことが困難な場合などに代弁していた。また、家族員にとって、言いにくいこと・うまくアピールできないこと・伝える内容が難しいこと、などについて代弁しており、具体的にわかりやすく表現する工夫をしていた。

2. 家族の中のパワーを調整する技術

安定した家族関係を維持したり、家族全体で合意形成をしていけるように、家族の中に存在するパワーのあり方を把握し、調整することが必要である。この技術には、「不均衡を調整する」という看護行動が含まれている。

「不均衡を調整する」行動は、家族の中のパワーを把握し、＜発言力を拡散させる＞＜発言力を抑える＞＜勢力を変化させる＞ことによってパワーの不均衡を是正したり、新たなパワーを作りだして、家族内のパワーを調整するアプローチである。

看護者は、家族のあり方や家族がおかれている状況に応じて、どのようなパワーが重要なのか、パワーが偏りすぎていないか、パワーが強すぎたり弱すぎたりしないかなどを判断しながら、家族内のパワーを調整していた。

また、看護者一人では家族員の力関係を調整することが困難な場面では、複数の看護者で不均衡を調整していた。

1) 発言力を拡散させる

家族内の力関係が、どこかに偏りすぎないようにする技術である。例えば、家族員の思いはバラバラで、もっとも発言力の強い長男が、脳出血で事故を起こした父の意向を確認せずに将来について意思決定を行おうとしている場面で、看護者は、意図的に発言の順番を工夫し、一人の家族員のパワーに偏りすぎないようにしていた。発言の機会を個々の家族員に振り分けることによって、一部の家族員の力で合意形成するのではなく家族全体で合意形成をしていけるように、偏りを調整していた。

2) 発言力を抑える

他の家族員の発言や存在を妨げている家族内のパワーを抑えて個々の家族員を活かす行為である。例えば、強い父との関係の中で、介護の大変さを言い出せない娘が発言できるように保健師は関わった。娘が介護の大変さや介護の仕方について語った場面では、「私もそう思うから、お父さんにちゃんとそう言いなさい」と言って関わり、父にも、「やっぱり一番の介護者が娘さんである以上、娘さんの意見は受けとめて、考えてくださいね、と話した…」と語っており、父の発言力がある程度抑え、娘自身が自分の意見を強めていけるようにサポートしていた。

3) 勢力を変化させる

家族内の勢力を見極め、影響力や決定権などのパワーを変化させる行為である。例えば、夫、妻、保健師の3人で、在宅サービスの導入について話し合ってきたが、経済的な心配から在宅サービスを拒否する夫と、サービスを導入したい妻との間で、話し合いは平行線であった。妻は知的障害があることから、夫は妻は状況がよくわかっていないと捉えていた。このような中で、保健師は、別居している息子が物事を決定する時には、パワーを持っており、息子が話し合いに入ることにより夫

と妻との勢力を変えることができると考え、息子に連絡を密にとり、話し合いに参加してもらいながら、家族内の勢力を変化させ、調整していた。

3. 専門家や家族のパワーを効果的に活用する技術

合意形成に向けて効果的に話し合いを進めていくために、看護者は効果的にパワーを活かす状況を作り、専門家のパワーを活用することが必要である。この技術には、「専門家のパワーを効果的に活用する」「家族のパワーを活かす」という2つの看護行動が含まれていた。

1) 専門家のパワーを効果的に活用する

「専門家のパワーを効果的に活用する」行動は、専門家のパワーを家族の合意形成に向けて効果的に影響させていくアプローチである。専門家のパワーとは、専門家が持っている権威や専門的能力、またはそれらを基盤にした家族の合意形成への影響力である。看護者は、合意形成において自らの影響力を強めたり、様々な専門家のパワーを活用したり、パワーを活かせる状況を整えていた。これには、<パワーを引きよせる><専門家のパワーを活用する><効果的にパワーを活かす状況を作る>という看護行動が含まれていた。

① パワーを引きよせる

看護者の影響力を強めて話し合いにおける中心的な役割を担うパターンを作り出す行為である。例えば、保健師は、夫、妻、息子の家族で、夫の在宅サービス導入についての話し合いの場面で、「私から見ても、このままにしておくとお父さんは寝たきりになってしまうということ、まずその状況を説明する。そして（息子の反応を確認しながら）…専門職として、このままでいいんでしょうか、という投げかけをしました。そんなことがあって、保健師さんお願いしますね…、僕らは素人なのでわからないので、と何回か言われたんです」と語っていた。保健師は、決定権を持っている息子に対してアプローチし、息子の気持ちを看護者に引き寄せて合意形成へと

導いていた。

② 専門家のパワーを活用する

医師などの専門家や家族以外の人のパワー・権威を活用する行為である。例えば、看護者は、利用可能なサービスの内容をわかりやすく比較しながら説明し、更に迷っている家族に対し、同行した理学療法士にも意見を求め、現在の患者のADLの状態と介助の必要性を話してもらった。

③ 効果的にパワーを活かす状況を作る

家族や専門家のパワーを発揮させ、それらを合意形成に効果的に影響させるために、役割分担を決める、事前の打ち合わせをするなど、話し合いの状況を整える行為である。

例えば、主治医と看護者は話し合いを持ち、家族と合意に到達するために、誰がどのような役割を担うことが適切なのかを話し合い、状況を整えていた。

2) 家族のパワーを活かす

「家族のパワーを活かす」行動は、家族員のパワーや家族のパワーを合意形成に活用するアプローチである。看護者は、家族員が持っているパワーの基盤や合意形成への影響力を把握し、権威を持っている家族員との関わりに注意を払いながら、家族のパワーを活かしていた。この看護行動には、<合意に近い発言を利用する><家族員のパワーを利用する><キーパーソンを活かす>という3つの看護行動が含まれていた。

① 合意に近い発言を利用する

家族員の発言を意図的に取り上げたり強化しながらそれが合意に向けて影響を及ぼすようにする行為である。例えば、看護者は、介護認定やヘルパー導入を迷っている奥さんに、娘の「お父さんの世話で大変になって、結局お母さんまで倒れて入院したら、私自身の生活も振り回されて困るから、是非ヘルパーを入れて」という意見を取り入れながら、「今回は、本当に娘さんの言うことも一理あるから、1回やってみよう」と、ヘルパー導入を勧めていった。

② 家族員の特性を活用する

家族員が備えている能力や個性を合意形成に活用する行為である。例えば、保健師は介護職でデイケアに勤めている娘さんに、患者の前でデイケアの話をしてもらい、娘さんからデイケアを勧める言葉を引き出し、「娘さんも行ってもらいたいみたいね」と患者に返していった。保健師は、娘さんの特性、パワーを活用して合意形成を支えていた。

③ キーパーソンを活かす

合意形成においてキーパーソンになる家族の反応や意見に注意を払いながら家族のパワーを合意形成に向かわせる行為である。例えば、看護者はこの家族では兄嫁2人が決定におけるキーパーソンであるとアセスメントし、嫁2人が納得がいくような話のもって行き方をしないと退院にはこぎつけないと考え、「取りまとめ役のお姉さん2人の意見・気持ちを重視して、受けが悪くならないよう安心感を持ってもらえるように気をつけて」、家族の合意形成を支援していた。

IV. 考 察

家族のパワーとは、家族が持っている他の家族員への影響力や家族の合意形成のプロセスへ影響を及ぼす力であると考えられる。看護者は、家族の持っているパワーの強さや家族内で行使されるパワーの偏り、他の家族員への影響力や合意形成への影響力について把握し、均衡させたり変化させながらパワーの調整を行っていた。

看護者は、家族員個々の存在や意思を家族の中で大切にし、家族が全体として合意形成にコミットしていくことを重要視して、特に弱い家族員に注意を払いながら家族のパワーをコントロールしていた。一方、家族が意思決定をしていくという課題を達成するために効果的にパワーを活用することを重要視して、強いパワーに注目しながら家族のパワーをコントロールしていた。

ここでは、1) 家族のパワーの特性、2) 家族の合意形成を支える技術の中での意味づけ、3) 家族のパワーを扱う技術の特徴、と

いう視点で考察する。

1. 家族のパワーの特性

家族のパワーとは、家族が持っている家族員への影響力や家族の合意形成のプロセスへ影響を及ぼす力である。このような力は、社会心理学、集団力学の領域では、社会的勢力と呼ばれているものに相当すると考えられる。

社会的勢力とは、集団内の人々に影響を及ぼし、様々な決定を左右するような力である¹⁾²⁾³⁾。また、社会的勢力は、①実体-構造的な概念である勢力の源泉と、②関係-機能的な概念である勢力の2つに大別できる、といわれている。安田²⁾によれば、実体-構造的な概念としての勢力とは、特定の個人または集団が持っている一つの属性であり、例えば経済力とか武力のように、直接的にその大きさを比較したり、優劣を検討できる概念である。これに対して、相手が誰であるかによって変わるものとして捉えるのが、勢力の関係-機能的な概念である。相手との関係から独立した勢力は存在せず、つねに勢力関係として存在する。

家族看護学においては、家族勢力を、家族システムの一つの次元として捉え、そのシステムの相互関係のもとで家族勢力を捉える視点を提示している³⁾。このように家族看護学においても家族勢力は重要な概念の一つとして位置づけられている。しかしながら、家族勢力と集団の勢力の相違は、家族勢力は実体的-構造的な側面を基盤としつつも、その場その場で「関係-機能的な側面」が顕在化し、強い影響力を及ぼすことであろう。渡辺⁵⁾が指摘しているように、実体-構造的な側面の勢力に関して、家族員が体力、生活力、経済力などの資源をどの程度有しているかによって規定されている。しかし、家族は強い運命的な歴史を内包したコミットメントを求められる関係性の上に成り立っているため、Friedmanが指摘しているように家族勢力はオーケストラ的でその状況や求められている家族機能によって異なっていると言えよう。したがって、家族勢力は、その時の家族の抱える問題や家族員の状況によって変化するので、家族の生活の局面ごとにその時もっとも大きな影響力

を持っているのは誰かを柔軟に捉えることの重要性を示している。このような家族勢力の特性が、本研究の結果で見られた家族パワーにおいても反映され、エキスパートの看護者はそれを踏まえて巧みな技術を活用していた。

家族員が病気になる状況では、従来の役割関係が変化し、家族の中にあったパワーのあり方が複雑になっており、時には、合意形成を家族で行っていくことが困難になったり、新しいスタイルを必要とするようになる。

「家族のパワーを活かす」行動に見られた“家族員の特性としてのパワー”や“合意に近い発言”の活用は、エキスパート看護者が、家族の実体—構造的側面の勢力を巧みに活用していた例である。「弱者を支える」行動では、関係性に現れるパワーの弱さを捉えたり、「不均衡を調整する」行動では、家族のおかれている状況に応じて、どのようなパワーが重要なのか、パワーが偏りすぎていないかを捉えていた。このように、エキスパート看護者は状況によって“キーパーソン”を特定して捉えていた。

2. 家族の合意形成を支える技術の中での意味づけ

家族の合意形成を支える技術は、看護者の姿勢やアセスメントといった『家族の合意形成を支える技術の基盤となるもの』を土台に、『家族の合意形成を支える技術の中核をなす技術群』『状況に応じて組み合わせて用いる技術群』の3層から構成されている。

『家族の合意形成を支える技術の中核をなす技術群』は、《家族の意思決定を支える技術群》《家族の力を保持する技術群》からなっている。

『状況に応じて組み合わせて用いる技術群』は、《家族の現実認識を深める技術群》《家族の相互作用を高める技術群》《家族のパワーを扱う技術群》《家族の感情を扱う技術群》からなる。これらは、常に用いられているわけではなく、合意形成が滞ってしまう場合、その家族の問題を見極め、状況に応じて組み合わせて用いられる技術である。つまり、家族の合意形成の中核である家族の力を保持しながら意思決定をすることを側面から支える

技術である。

《家族のパワーを扱う技術》は、①家族の合意形成の中核である意思決定のプロセスを効果的に進めることを支える機能、②状況によって家族の勢力を活用することで、家族全体として合意形成にコミットメントさせていく機能を有していると考えられる。

家族は、家族員が病気になることによって、パワーの持ち方が変化したり、役割の持ち方が変化し、家族の中にあったパワーのあり方が複雑になっており、時には、合意形成を家族で行うことが困難になったり、新しいスタイルを必要とするようになる。看護者は、家族内のパワーのあり方を把握して、弱い家族員がそのパワーを発揮できない状況、家族内のパワーに不均衡が見られる状況、看護者や専門家がそのパワーを効果的に発揮できない状況において、家族のパワーを調整し、合意形成に影響させることによって、家族全体で効果的に意思決定をすすめ、合意形成を行うことを支えていると考えられた。

3. 家族のパワーを扱う技術の特徴

1) 家族が均衡を保ちながら全体として合意を形成する

看護者は、家族のパワーを扱う場合、家族員がそれぞれの考えや希望を十分に出して話し合いをしながら、家族全体で合意形成をしていくことを意図していた。また、家族のパワーは均衡を保つという方向で調整していると考えられた。

【家族の中の弱者を支える技術】は、パワーの弱い家族員の存在を保護し、その立場や意見を補強したり、代弁することで、家族内での位置づけを確立するものである。すなわち、家族の中で相対的にパワーを強めることによって、家族内のパワーは強さにおいて、均衡を保つという方向に変わっていると考えられる。このような家族内のパワーのあり方の中で、弱者の考えや意向は、合意形成のプロセスに取り入れられ、弱者も含めた家族全体での合意を形成していけるように意図された技術である。

【家族の中のパワーを調整する技術】に含まれる<発言力を拡散させる><発言力を抑

える>行為は、パワーの偏りを是正することによって、一部の家族員の発言だけでなく個々の家族員の意思を合意形成の場面に上らせることを意図しており、家族全体での合意形成を目指している。また、パワーの不均衡は、①特定の家族員のパワーが突出して発現している、②家族内の様々なパワーを妨げるパワーが存在している、のようにパワーの偏りという状態が家族に生じている。このような不均衡は、パワーを拡散させる、パワーを抑える、ことによって、調整することができ、家族内の様々なパワーや妨げられていたパワーを発揮させる技術である。<勢力を変化させる>という技術は、家族の状況に応じて、新しいパワーを生み出すことによって、家族員への影響力や決定権などの勢力を変化させていく技術である。安定状態や均衡は、停滞を意味するのではなく、持続的な変化と成長が起こっている合間に必要とされるバランスを意味している³⁾、と述べられているように、看護者は、健康問題や家族状況の変化に応じて、新しいパワーを生みだし、家族の勢力関係に影響させながら家族としての均衡を維持しながら、合意形成をしていけるように関わっていた。

2) 多様な人材のパワーを活用する

看護者は、複雑な家族のパワーを扱うにあたって、個々の家族員の持っているパワー、家族内の合意形成へ向かうパワー、他の専門職の持っているパワー、家族に影響を及ぼしうる他者のパワーを合意形成の場面で発揮させていた。そして、それらのパワーを効果的に活用していく技術と共に、看護者自身が家族に対して行使しうるパワーを強める技術をも用いていた。これらの特徴は、【専門家や家族のパワーを効果的に活用する技術】において<専門家のパワーを活用する><家族員の特性を活用する><合意に近い発言を活用する><キーパーソンを活かす>という働きかけに見られるように、顕著に見られる。しかし、【家族の中の弱者を支える技術】や【家族の中のパワーを調整する技術】においても看護者が直接的に介入するだけでなく、家族員のパワーを活用しながら、家族で合意形

成に向かうことができるように関わっていた。また、複数の家族のパワーを扱うために、看護者は単独ではなく複数の看護者で関わる、他の専門家と共に協働して関わる、という工夫が見られた。

V. ま と め

本研究の結果、家族の合意形成を支えるために状況に応じて組み合わせられて用いる技術の1つとして、《家族のパワーを扱う技術群》が明らかになった。看護者は、家族が合意形成をしていく場面で、家族のパワーが、家族の問題解決の仕方や意思決定にどのように影響を及ぼしているのかを把握し、【家族の中の弱者を支える技術】【家族の中の不均衡を調整する技術】【専門家や家族のパワーを効果的に活用する技術】を用いて家族が全体として合意形成にコミットし、家族内の勢力や影響力を合意形成に活かすように支援していた。

《家族のパワーを扱う技術群》は、常に用いられているわけではなく、合意形成が滞ってしまう場合、その家族の問題を見極め、状況に応じて組み合わせられて用いられる技術である。つまり、家族の合意形成の中核である家族の力を保持しながら意思決定をすることを側面から支える技術である。

家族のパワーの特性は、「実体的-構造的な側面」の勢力を基盤としつつも、家族の生活の局面で、「関係-機能的な側面」の勢力が顕在化し、強い影響力を及ぼすという家族勢力の特性が反映されており、看護者は、それをふまえた巧みな技術を活用していると考えられた。また、家族のパワーを扱う技術は、①家族が均衡を保ちながら全体として合意を形成する、②多様な人材のパワーを活用する、という特徴を持っていた。

本研究は、ロールプレイをもとに技術の抽出を行った上で18名の看護者を対象にインタビューしたものであり、合意形成に関するあらゆる状況や場面を反映しているとは言い難い。《家族のパワーを扱う技術群》は、状況に応じて用いられる技術群の中でも使われている場面が少なく、看護者からのフィードバック

クにおいても、活用状況が少ないことや活用が難しいという反応が得られ、この技術を臨床場面で活用することの困難さがうかがわれた。今後は、インタビューの対象者を増やすことによって、この結果を検証していくとともに、技術を活用しながら本研究の結果の妥当性を検討し発展させていくことが必要であろう。

謝 辞

データ収集にあたり、ご協力いただいた看護者の皆様に心より感謝申し上げます。

(本研究は、文部科学省科学研究補助金基盤研究B一般(2)の補助金を受けた研究の一部である)

<引用・参考文献>

- 1) 大坊郁夫, 安藤清志, 池田謙一編: 社会心理学パースペクティブ2 人と人とを結ぶとき, 誠信書房, 1990.
- 2) 大坊郁夫, 安藤清志, 池田謙一編: 社会心理学パースペクティブ3 集団から社会へ, 誠信書房, 1990.
- 3) Frirdman, M.M; Family Nursing: 野嶋佐由美監訳 家族看護学 理論とアセスメント, 195-196, 203-213, へるす出版, 1993.
- 4) 岡堂哲雄: 集団力学入門 人間関係の理解のために, 医学書院, 1974.
- 5) 鈴木和子, 渡辺裕子: 家族看護学 理論と実践第2版, 86-87, 日本看護協会出版会
- 6) 羽山由美子: グループに内在する治療因子と看護への活用, ころの看護学, Vol. 3, No1, 1999.
- 7) 長戸和子他: 退院・在宅ケアに関する家族-看護者の合意形成に向けての介入方法の開発, 科学研究費補助金研究成果報告書, 2001.